

日本語の動詞の分類に関する一考察

西隈俊哉

永進専門大学（韓国）

Abstract:

There are numerous and complex characteristics in Japanese verbs, especially when it comes to classify the intransitive and transitive verbs. Recently, in the attempts to account for the correspondence of intransitive verbs and transitive verbs, many studies have proposed new criteria for the verbal classification.

The purpose of this study is to try to classify Japanese verbs according to the following three points: "whether or not a verb has its correspondent transitive/intransitive partner", whether such and such verb expresses "volitionality", on one hand and "agentivity" on the other hand, as those two points have been considered as crucial in recent studies.

Our study will show that Japanese verbs can be divided into five groups, according to those three criteria. It was also found that one of the groups aligned with a verb group classified in other researches.

1. はじめに

日本語の動詞には自動詞・他動詞の対応が形態的に存在するが、その区別においては複雑な点が多い。

また、今日まで動詞の自他については様々な視点で論じられてきた。

歴史的には、江戸時代の後期から動詞の自他に関する文献が見られ、その中でも本居春庭の『詞通路』(1828)は動詞の自他の研究を開花させたものとして知られている。明治になり「自動詞・他動詞」ということばが使われるようになった。

そして近年、動詞の自他を分類しようとする試み、もしくは動詞の自他の対応を探ろうとする試みは様々な視点で論じられてきている。形式面から対応を考察したもの、ヴォイス・テンス・アスペクトとの関わりから動詞の自他を考察したもの、受身・使役などの関わりで考察したものなど様々である(注1)。

本稿では、日本語の動詞の自動詞と他動詞の区別について、受身・可能・自発や使役との関係を述べると共に、近年よく取り上げられている「意志性」「動作主性」という視点による動詞の分類について考察する。

2. 自動詞と他動詞の区別

奥津(1967)は、自動詞と他動詞の対応を「転化」という概念で捉え、自動詞が他動詞に転化する「自動化転形」、及びある共通要素から自動詞及び他動詞に転化する「両極化転形」の3つを提示している。

例を示すと、

- (1) 乾く－乾かす 他動化転形
- (2) 曲げる－曲がる 自動化転形
- (3) 帰る－帰す 両極化転形

ここでは省略してそれぞれ「他動化」、「自動化」、「両極化」と呼ぶことにする。

さて、奥津によれば代表的な他動化辞（注2）として「-as-」が、代表的な自動化辞として「-ar-」が挙げられているが（注3）、形態素の面から考察した場合、以下のことが考えられる。

他動化は「せる・させる」による使役化との関係があるものと考えられる。

- (4) a. 太郎が小説を書く。
- b. 太郎に小説を書かせる。（使役化）
- (5) a. ロボットが動く。
- b. 太郎がロボットを動かす。（他動化）

これは、項を1つ増やすという面でも類似性がある。

一方、他動化に対し、自動化は「れる・られる」による受身化・可能化との関係があるものと考えられる。

- (6) a. 太郎がこの小説を書いた。
- b. 太郎によって、この小説が書かれた。（受身化）
- (7) a. 警官がどろぼうを捕まえた。
- b. どろぼうは警察に捕まった。（自動化）
- (8) a. 太郎が棚に荷物を上げた。
- b. この荷物、その棚に上げられますか。（可能化）
- (9) a. 男4人が2階にテーブルを上げた。
- b. 男4人で2階にテーブルが上がった。（自動化）

これらのことは井上(1976)でも指摘されていることである。まず、自動詞の他動化については以下のような動詞群を掲げている。

	自動詞	使役形	他動詞
A.	tob	tobase	tob-as
B.	hiye	hiye-sase(sas)	hiy-as
C.	todok	todok-ase(as)	todok-e
D.	toor	toor-ase(as)	toos
E.	konare	konare-sase(sas)	konas
F.	nor	nor-ase(as)	nose
G.	ag-ar	ag-ar-ase(as)	ag-e
H.	kudak-e	kudak-e-sase(sas)	kudak

上の表で、自動詞の語幹が子音で終わっているC、D、F、Gの使役形が、Aの他動詞形と、非常によく似ていることを指摘している。

これが他動詞化と使役化が関係あるとする根拠の一つとしている。

一方、他動詞の自動化については、可能については、「可能形式素と自動化形式素とは別個のものとして扱わなければならない」と述べているが、類似に関しては述べられていない。また、受身との関係はほとんど論じられていない。しかし、自動詞化と受身化・可能化の類似点は(6)～(9)に見られるように、何らかの形でありそうだとすることを捉えることはできる(注4)。

しかし、その一方で受身化・可能化によらない自動詞の存在がある。

- (10) a. 警備員が議長を通した。
 b. 議長が通った。
 (11) a. 先生は太郎を帰した。
 b. 太郎は帰った。

(10b) は「議長が通された」とか「通ることができた」という意味合いは持たず、議長が自らの意志で「通った」という解釈が可能である。

(11b) も同様で、太郎が自らの意志で「帰った」という解釈が可能である。(10b)・(11b)のような、受身化・可能化によらない自動詞とそうでない自動詞の差は何であろうか？

このような自動詞の多くは奥津の「両極化転形」に分類された動詞群に多い。(10)・(11)の動詞のほかに、「立つー立てる」「並ぶー並べる」がある。

しかし、その一方で両極化転形の「開くー開ける」「割れるー割る」は「自らの意志」というようなものの解釈を受けることが難しい。

- (12) a. 太郎はドアを開けた。
 b. ドアが開いた。
 (13) a. 太郎はコップを割った。
 b. コップが割れた。

(12b)・(13b)は、上記で触れた「自らの意志である動作をした」という解釈ができない。どうも同じ両極化転形とはいえ、解釈が異なるものが複雑に入り交じっているように見える。「自らがその動作を引き起こしているかどうか」ということが動詞の自他を分ける際に重要なカギとはなりえないであろうか。

3. 意志性と動作主性

青木(1997)では、自動詞を分類する際に「意志性」「動作主性」などに触れている。表1は「意志性」「動作主性」によって自動詞を分類したものである。

青木によれば「意志性」というのは、可能を意味する接辞「(ら)れる」及び「ことができる」が付加可能か否かに関係あるとしている。タイプの1は「(ら)れる」及び「ことができる」が付加可能なため、2は「ことができる」は付加動作主性というのは文の主体が「有生(animate)」なのか、あるいは「無生(inanimate)」なのかという

<表1>

タイプ		動作主性	意志性
1	上がる、止まる、集まる、動く、…	有生	表出可能
2	受かる、助かる、育つ、増える、…	有生	表出難
3	決まる、載る、開く、閉まる、…	無生	表出不可
4	見える、割れる、折れる、切れる、…	有生・無生	表出不可

ことを指す。青木が動作主性の根拠としている引用部分を以下に示す。

Agency : It is obvious that participants high in Agency can effect a transfer of an action in a way that those low in Agency cannot. Thus the normal interpretation of *George startled me* is that of a perceptible event with perceptible consequences; but that of *The picture startled me* could be completely a matter of an internal state. (Hopper and Thompson: 1980)

青木の挙げた「動作主性」は、タイプ1, 2においては可能の接辞「(ら)れる」及び「ことができる」を付加したときに「有生か否か」を判断して有生としているのに対し、タイプ3, 4においては動詞のみで判断している。

そこで、可能の接辞を付加せずに動作主性の有生・無生を観察すると以下のようなになる。

<表2>

1	有生・無生
2	有生・無生
3	無生
4	無生

タイプ4が無生だけになっているのは、タイプ4の動詞のうち「見える、聞こえる」のような主体の知覚能力を表わす動詞が有生となっているので、ここでは除外したためである。

このようにして、タイプ1から4までの動詞グループを見ると、以下のようにまとめ直すことができる。

<表3>

タイプ		動作主性	意志性
a	上がる、止まる、集まる、動く、…	有生	表出可能
b	受かる、助かる、育つ、増える、…	有生	表出難
c	決まる、載る、開く、閉まる、…	無生	表出不可

青木のとの大きな違いは、タイプ3, 4はここでは一緒にして扱っていることである。タイプ3, 4は動作主性及び意志性が同じ傾向を持つためである。

多少の修正をしたが、青木の挙げる「意志性」「動作主性」というのは、2. で挙げた「自らがその動作を引き起こしているかどうか」とも関係する点があり、動詞を区分するのに有用な要素であるといえるのではないだろうか。

4. 有対他動詞と無対他動詞

動詞の分類において「対応する自動詞が存在するかしないか」という視点での他動詞の区別がある。早津(1989)の「有対他動詞・無対他動詞」がそれである。

早津は、他動詞が対応する自動詞が存在するかどうか(注5)という点で2つの種類に分けられることを指摘し、対応する自動詞がある他動詞を「有対他動詞」、対応する自動詞がない他動詞を「無対他動詞」と呼んでいる。

(14) 有対他動詞の例

壊す、伸ばす、かける、はずす、埋める、回す、決める 等

(15) 無対他動詞の例

読む、たたく、おく、悲しむ、話す、考える、占める 等

両者の違いを簡単に述べると、前者(以下の例文では(16))は働きかけにより対象が場所・形状・事態・状況などの変化を含意するのに対し、後者(以下の例文では(17))にはそれがない。

(16) a. ?コップを割った。そのコップで水を飲んだ。

(17) a. 本を読んだ。その本を今度は枕にした。

前者は反復表現(「何度も」などの副詞を付加すること)にした場合、複雑な反復動作を表わすのに対して、後者の反復表現は単純な反復動作を表わす。

(16) b. その職人は自分で作った釜を何度も壊した。

(17) b. 同じ本を何度も読む。

前者は結果・状態を表わす副詞が付加しやすいのに対して、後者は付加しにくい。

(16) c. 積み木をばらばらに崩した。

(17) c. ?扉をボロボロにたたいた。

結論として、早津は有対他動詞には働きかけの結果の状態に注目する動詞が多く、無対他動詞には働きかけの過程の様態に注目する動詞が多い、と述べた(注6)。

さらに自動詞についても、早津(1987)が「対応する他動詞が存在するかしないか」で分類している。対応する他動詞のある物を「有対自動詞」ないものを「無対自動詞」と呼ぶことにする。

(18) 有対自動詞の例

壊れる、伸びる、かかる、はずれる、埋まる、回る、決まる 等

(19) 無対自動詞の例

行く、歩く、笑う、泣く、黙る 等

両者の相違点を簡単に述べると、「働きかけによってひきおこしうる非情物の変化を、有情物の存在とは無関係に、その非情物を主語にして叙述する動詞である」ということである。なお、「働きかけ」については早津は宮島(1972)(注7)の引用文を利用して「自他対応の有無に関わらず、動詞が対象を取り、それに対して行為をする」という意味であるとのべている(須賀・早津編1995:228)。

自動詞、他動詞に対があるかどうかということは自他の分類をする際には重要な視点であると思われる。例えば、3. で扱った動詞群というのはすべて対のある自動詞・他動詞であり、すべての動詞を対象としている訳ではない。まずすべての動詞を分類する時にこの視点が適応されるのがよいと思われる。

5. 「意志性」と「動作主性」

さて、ここで先ほど挙げた「意志性」「動作主性」についてももう一度議論することにする。まず、動作主性について考察する。動作主性による場合では、タイプ a, b と c の2つに分かれることになるが、主体が動作を直接引き起こせるかどうかによって見た場合、

- (20) 太郎が階段で10階まで上がった。
- (21) 議長が会議場の門を通った。
- (22) 隊長は、周りの反対を押しきって前線に残った。

(20) では太郎が、「上がる」という動作の直接の主体になっているように、(21)・(22) もそれぞれが動作の直接の主体となっている。

タイプ a が、主体が動作を引き起こしうる要素になり得るのに対し、タイプ b はそうはなり得ない。

- (23) 太郎は試験に受かった。
- (24) 隊長は幸運にも助かった。

(23) は太郎自身は努力はしたであろうが、試験に合格か否かは別の要素が関係しているように思われる。(24) は隊長が自ら努力して助かったというより、「助けられた」というような受身のニュアンスを持つ。

勿論、(20)～(22)の動詞も主体が動作を引き起こしうる要素になり得ない場合がある。

- (25) 会長の代わりに社長が舞台上がった。
- (26) 各国の議長が次々と会議場の門を通った。
- (27) 部下が次々と死んでいって最後に隊長が残った。

(25)～(27)のいずれも直接動作を引き起こす元になっているようには見えない。

(20) ~ (22) と (25) ~ (27) の間の関係はちょうど意志性の有無（青木1997の場合、意志性の表出可能性）にも関係する。

「意志性」は他動詞はほとんどが持つ。青木(1997)が自動詞の分類で用いた方法同様に可能を意味する接辞が付加できたり（(28)・(29)）、(30)のように意志性を持たないことを示唆する副詞が付加できない。

- (28) 食べられる
- (29) 食べることができる
- (30) *自然に食べた。

これに対し、自動詞の方は「意志性」を持つ場合と持たない場合がある。先ほどの動作主性（動作主体の表出可能性）と並行している。

- (31) 議長が通った。
- (32) 議題が通った。
- (33) 花びんが割れた。

(31)・(32)は1つの動詞が持つ場合と持たない場合の両方があるケース、(33)は「意志性」を持たないケースである。

タイプbの動詞は意志性が表出が困難であるが、意志の表出を誘導するような文を作ってみることによって意志性を感じ取ることはできる。

例えば、意思を表わす接辞「(よ)う」を付加してみると、

- (34) 試験に受かろうと思って一生懸命勉強した。
- (35) ひとりだけ助かろうとして逃げましたね。

どちらも「~しようとして、~した」というような意味合いの文になる。

また意志に近い、希望を表わす「たい」を付加してみる。

- (36) 今度こそ、あの試験に受かりたい。
- (37) 早く救助隊に見つけてもらって助かりたい。

主体が有生の場合においては意志性を見出すことはできないことはない。それに対し、タイプcの動詞はどのようにしても意志性を感じ取ることはできない。こちらも同様に「(よ)う」と「たい」を付加してみる。

- (38) *開こうと思ってドアを押してみた。
- (39) *あなただけ決まろうとして、就職活動をしましたね。
- (40) *ドアが開きたい。
- (41) ??早く就職先が決まりたい。

(41)に除き、いずれも非文になる。

自動詞に「たい」が付いた場合はおそらく動作主が有生か否かで非文性が左右されると思われる。よって、(41)は、就職する、もしくは

22 は就職先を探している人の存在のため、非文にはならないのであらうと思われる。

よってこのことから、タイプ a は意志性の表出が可能で、b が表出困難、そして c が表出不可能であることがいえる（注 8）。表 3 の示す通りである。

6. まとめ

6. 1. 動詞の自他及び動作主性・意志性による分類

対応する自動詞・他動詞が有無及び、動詞のもつ動作主性・意志性に基づいた結果、日本語の動詞は以下のように分類することができる。

①のグループ：（自動詞側から見て）対応する他動詞がなく、他動化させるには使役の形態素を必要とするもの。（絶対自動詞）

歩く、泳ぐ

②のグループ：（他動詞側から見て）対応する自動詞はあるが、意志性・動作主性がある場合とない場合の2つあるもの。

動く－動かす、残る－残す、上がる－上げる

③のグループ：（他動詞側から見て）対応する自動詞はあるが、動作主性はないが、意志性においては困難ながらも表出がありえるもの。

受かる－受ける、助かる－助ける、育つ－育てる

④のグループ：（他動詞側から見て）対応する自動詞はあるが、意志性・動作主性がないもの。

開く－開ける、壊れる－壊す、割れる－割る

⑤のグループ：（他動詞側から見て）対応する自動詞がなく、自動化させるには使役の形態素を必要とするもの。（絶対他動詞）

読む、食べる

それぞれのグループについて多少の補足をする。

①のグループは、主体に動作主性、意志性をもつものが多い（注 9）。それゆえ、可能を表わす接辞「（ら）れる」「ことができる」、そして意志を表わす接辞「（よ）う」も付加可能である。主体が無生である場合、意志性を持っていることはないが、②のグループとは異なり1つの動詞が意志性を持つときと持たないときの両方があるということはない。

②のグループは主に動作主が有生か無生かによって意志性の有無が決まる。

- (41) a. 人形が動いた。
b. *人形は動ける。
c. *人形は動くことができる。
d. *人形は動こうと思った。

主体が無生の場合、意志性を持つことはできないようである。(41b)～(41d)のように意志性に関係ある表現にした場合、非文になるため

- (42) a.太郎が動いた。
 b.太郎は動ける。
 c.太郎は動くことができる。
 d.太郎は動こうと思った。

すべての文が可能であり、意志性を持っているといえる。

③のグループは5.でも述べたように、意志性は表わしにくいものの、意思を表わす接辞「(よ)う」などが付加可能である。しかしその一方で、主体は動作を引き起こしうる要素になり得ない。

- (43) 太郎は試験に受かろうと思って一生懸命勉強した。(=(34)に類似)

④のグループは意志性は表わせず、主体は動作を引き起こしうる要素になり得ない。

- (44) *開こうと思ってドアを押してみた。(=(38))

⑤のグループは主体が有生であることが多く、意志性はどの動詞にも含まれるものと思われる(注10)。また、「反復表現は単純な反復動作を表わす」「結果・状態を表わす副詞が付加しにくい」などの意味的特徴がある。

6. 2. この分類が意味するもの

<表4>

	I	II	III
①	歩く 泳ぐ		
②	動く 残る 上がる	動く 残る 上がる	動かす 残す 上げる
③		助かる 受かる	助ける 受ける
④		開く 壊れる 割れる	開ける 壊す 割る
⑤			読む 食べる

筆者がこの表で示した動詞の分類の順序を簡潔にまとめると以下のようになる。

まず、動詞を自動詞・他動詞という2つのグループに分ける。そして対応する他動詞(自動詞)があるかないかで、さらに分ける。(この時点で、①/②~④/⑤の3つのグループができる)

次に自動詞は「意志性・動作主性の有無」によってさらに2つのグ

ループに分かれる。意志性・動作主性がある場合の自動詞はⅠ、そうでない場合はⅡとした。そして他動詞はⅢとした。そしてさらに、意志性・動作主性がある場合ない場合、及び意志性の表出可能性などから②・③・④の3つに分けた。

これにより、かつての研究で分類されたものと同じものを当てはめることができる。3点ほど簡潔に紹介する。

<1>天野(1987)が挙げている、「動き変化他動詞」「動き他動詞」の区別は④と⑤の区別にほぼ一致する。なお、「動き変化他動詞」とは主体の動きと客体の変化の両方の意味を持つ他動詞、「動き他動詞」とは主体の動きだけを表わす他動詞を意味する。

<2>表4のⅡの動詞群は、寺村(1982)のいう「自発態」と重なる部分がある。寺村は「他動詞のうちのⅠ類、つまり5段活用をする動詞の語幹に‘-e(ru)’という形態素がついたものを標準の形とする」(寺村1982:272)としており、上記の表のⅡの④の一部分からは、おそらくⅡの④全体、そしてⅡの③からⅡの②まで拡大解釈できるものと思われる。

構文・意味的特徴

Xが V-(自発形)

Xに、それがV-で表わされる動作・作用を受けた結果であるような変化が起こる。

しかし、その動作・作用の主体は意識されず、Xが「ひとりで」そうなるということを表わす。(したがって、一般の動作・作用の主体は文に現れることはない。)(寺村 1982:279)

<3>自動詞より分かれたⅠとⅡであるが、これはJacobsen (1991)による「意志的自動詞」(intentional intransitive)と「自発的自動詞」(spontaneous intransitive)の区別に等しいものと思われる。

また、Ⅱのグループは英語で "middle" とよばれたり、日本語で「中間動詞」と呼ばれる動詞の下位分類に類するものと思われる。このⅡグループという分類は大変興味深い分野であり、可能形や受身形との語彙的・意味的な接点を何らかの形で持っている。上記に揚げたような寺村(1982)の研究をはじめ、様々な論考がある。

7. おわりに

Jacobsen(1991)、青木(1997)をはじめ、動詞の分類・分析を「意志」「動作主」という面から行っている論考は多いが、これと早津(1987, 1989)による「動詞に対があるかどうか(有対・無対)」をあわせて考察すると動詞に一定の分類がなされることが分かった。

それによって自他の分類は3つ、自他対応のパターンは5つに分けることができた。自他の分類は自動詞がさらに2つに別れることによるため3つになるのであるが、この分類は従来の動詞の自他分類を踏襲しつつも、新たな点も持っているものと思われる。

今回の分類において成果があったと思われるのは、6. 2の表の②のグループのような、「歩く」と「開く」が同じ自動詞でありながら違うものであることは感じ取る事ができるのであるが、「残る」など

のような「歩く」の仲間とも「開く」の仲間ともとれる自動詞を区別したことではないだろうか。「残る」などのような、ある時は「歩く」の仲間であり、ある時は「開く」の仲間であるということを確認に指摘したものはいままでのところあまり見受けられない。

最後に、言語習得との関わりから簡潔に述べる。この動詞分類はさらに細かく分類することも可能であるが、現時点ではこのくらいの分類が人間の言語運用を考慮しても有用であろうと思われる。これは、言葉を習得する際「人間はそれほど複雑な処理を行ってはいない」という持論によるものである。今後、日本語を母語としない人がどのようにして動詞の自他を処理しているかを探ってみる必要があるだろう。

注

- 1) 詳しくは須賀・早津編(1995: 207-231)参照。
- 2) 奥津(1967)では、「他動化辞」「自動化辞」という言葉が使われているが、これはそれぞれ「他動化形態素」「自動化形態素」と同じものとみなしてもよいのではないと思われるが、その他にも他動化・自動化に関係する形態素を多数認めなければならないので、その整理が煩雑となるかもしれない。以下は、興津が挙げた「-as-」「-ar-」以外の自動化辞・他動化辞である。
 その他の他動化辞 -kas-, -se-, -os-, -s-
 その他の自動化辞 -are-, -sar-, -or-, -ur-
 なお、井上(1976)では「他動詞化形式素」「自動詞化形式素」と呼ばれている。
- 3) 西尾(1988)も ar- (西尾:1988 内では -aru) は他動詞からの派生であるとみなしている (pp.154-5)。
- 4) 学習者の発話・作文においても以下のような誤用が見られる。これは学習者が自動化と受身化を間違えているからではないだろうか。
 (a) *友達から電話がかかわれてきた。(→かかってきた)
 (b) *1時間ごとに人がかわられた。(→かわった)
 間違える、という点から類似点に組み入れることは可能であろう。
- 5) 早津は、他動詞と自動詞の間に形態的・意味的・統語的な対応が成り立つ場合のみ、その他動詞と自動詞が対応するとみなしている。
- 6) この表現は早津 (1989: 253) をそのまま抜き出したものである。筆者はこの表現が有対他動詞・無対他動詞の傾向を示すもので必ずしもこの意味の通りには行かない場合があることもふまえてはいる。
- 7) 宮島達夫(1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 8) そうすると「増える」は意思を表わす接辞「(よ)う」や、希望を表わす「たい」が付加できないので、タイプcに入れなければならないかもしれない。
- 9) ①のグループの中には「降る」のように主体が無生で、意志性を持たない自動詞がある。今回はこのような自動詞は、意志性・動作主性よりも、対応の有無を優先して①に分類した。
- 10) ①のグループには主体が無生で、意志性のない動詞がありえたが、⑤のグループでも主体が無生で意志性の場合もありえないことはない。しかし、これも今回は意志性・動作主性よりも、対応の有無を優先して⑤に分類した。グループ①や⑤における意志性・動作主性の問題は今後の課題としたい。

参考文献

青木ひろみ(1997) 「《可能》における自動詞の形態的分類と特徴」『神田外語大学大学院紀要「言語学研究」』第3号、神田外語大学大学院

- 天野みどり(1987) 「状態変化主体の他動詞文」、『国語学』151、国語学会
- 井上和子(1976) 『変形文法と日本語』下巻、大修館書店
- 興津敬一須賀一好・早津恵美子編(1995) 『動詞の自他』、ひつじ書房
- 寺村秀夫(1982) 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』、くろしお出版
- 西尾寅弥(1988) 『現代語彙の研究』、明治書院
- 西隈俊哉(1997) 「日本語の可能表現に関する一考察」『南山日本語教育』4号、南山大学大学院
- 早津恵美子(1987) 「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語論的特徴」『言語学研究』6、京都大学言語学研究会
- 早津恵美子(1989) 「有対他動詞と無対他動詞の違いについて一意味的な特徴を中心に」『言語研究』95、言語学会

Hopper, Paul J. and Thompson, Sandra A. (1980) "Transitivity in Grammar and Discourse" *Language*. 56-2, 251-299

Jacobsen, Wesley M. (1991) *The Transitive Structure of Events in Japanese*. Kuroshio Publishers.